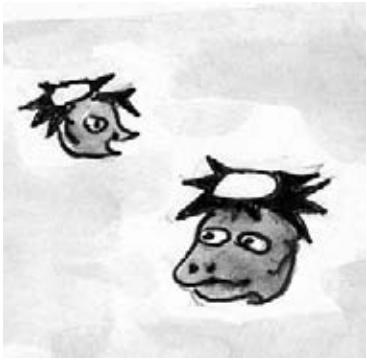
みんなの童話

兄弟カッパ



人里はなれた山の沼に、太郎と次郎といういたずら好きの、兄弟カッパがおりました。里に下りて畑の作物を荒らしたり、人をおどろかせて楽しんでいました。

「今日はシリぬきにいくぞ。おれは人間のシリをぬくから、次郎は馬のシリをぬけ。どちらがおもしろくぬいてくるか競争だ」

兄の提案で、兄弟カッパはそれぞれに里へ下りて行きました。

太郎は、わらで体をかくして里の中を回りました。カッパは妖怪（ようかい）だ、と思っている人間に見つかれば何をされるかわからない。だから危険の少ない馬の方を弟にさせたのでした。

「すもうを取る者はいないかぁ、おれとすもうとらないか！」

太郎は声をかけて回りました。すもうの好きな者もいました。

三、四人の男がいどんできました。でも太郎にはかないませんでした。最後に里一番の力じまんの男との勝負でした。

よぅーし、こいつを投げたおしてシリをぬいてやるぞ、太郎はそう思って取っ組みました。

ところが、男のばか力にはかないませんでした。どうしてだぁ、力がでない。逃げなきゃ投げころされちまうと、けんめいにもがきましたが、男は太郎のうでをつかんだままはなしません。

もうだめだ、そう思った時するっと体がぬけました。助かった！太郎は後も見ずに逃げました。

「おーい忘れ物だぁ、カッパ！」

男が呼んだが太郎はむちゅうで走りました。カッパと呼んだ声だけが耳に残っていました。

沼に着いた時、「ふへぇ！」、太郎はびっくりぎょうてん、ひっくり返りました。うでがぬけてなくなっていたのです。

弟の次郎は、途中の畑で好物のキュウリを腹いっぱい食い散らして、遊びながら歩きました。

里道に出た時、馬を引いた百姓の来るのが見えました。

しめたぁ、あの馬のしりをぬいてやれ、と近づいて来た馬のしっぽにしがみつきました。

百姓はそんなことには気がつかずに家に着きました。よぅし、ぬいてやるぞ、そう思って次郎がしっぽをはなした時、

「おーい！　カッパだぁ！」

しまったぁ、と思ったがおそかった。かけつけた男たちに取っつかまり、馬小屋の柱にしばりつけられてしまいました。

神通力さえ使えれゃ・・・・、でも頭のさらに水がなければ神通力は通じません。次郎は遊びすぎて水をからしたことをくやみました。

今ごろどうしてるだろか・・・・、身動きもできない次郎でしたが、太郎のことが案じられました。

水、みずー、みずがほしーい、次郎はこれほど水がほしい、と思ったことはありません。

「お、これがカッパか。でもしょげかえってかわいそうに」

馬にカイバをやりに来たおかみさんでした。

「水が飲みたいだろ、やろかな」と、バケツの水を次郎の頭にかけました。かわききっていたさらに水が貯まりました。

ぐぐーっ、次郎に神通力がわきました。柱を引っこぬき、馬小屋をおしつぶし、おかみさんをつきとばして山へはしりました。

その夜、太郎と次郎は話し合いました。昼間のことが気になり、心が痛んだからです。

太郎は、「里の男たちはカッパと知っていても、すもうを取ってくれた。少しもこわがっていなかった」と、弟に話しました。

次郎は、「親切に水をくれたおかみさんをつきとばし、馬小屋をおしつぶして逃げて来た。しばられたのも、馬のシリをぬこうとしたからだ」と、兄に話しました。

人間にきらわれたり、こわがられるのは、悪さをしたり、神通力で困らせているからだ。太郎と次郎はそう思いました。

「あした、あやまりに行こう」

次郎は、川魚をおみやげに、太郎は、両うでを返してもらいに。

兄弟カッパは、もう神通力などいらない、里人にも仲良くしてもらえるカッパになるんだ。と、星空を見上げてちかいました。夜は静かにふけていきました。

◇　◇

新年おめでとうございます

寺沢正美